

第75回結核予防全国大会 おことば



令和6年3月15日（金）

はじめに、この度の能登半島地震により被災された方々へ心よりお見舞いを申し上げますとともに、亡くなられた方々に哀悼の意を表します。

石川県支部では、被災地での健康診断の再開に向けて準備を始めており、また石川県の婦人会では、被災者の支援活動をおこなっていると伺いました。そして一部の結核予防会施設からは災害支援ナースが避難所の支援に参加したと聞いております。震災の影響を受けた多くの人々の健康が守られますよう、皆さまと共に心から願っております。

本日、「第75回結核予防全国大会」がここ東京都において開催され、皆さまにお会いできましたことを、大変うれしく思います。

本大会におきまして、「第27回秩父宮妃記念結核予防功労賞」の表彰を受けられる皆さまに心よりお祝いを申し上げます。またこの度の受賞者をはじめ、長年にわたり結核対策に貢献された方々に深く敬意を表します。

日本における結核の現状を見ますと、罹患率は着実に低下し、2021年には低まん延国となりました。しかし、いまだに年間約1万人以上が新たに結核を発症しております。また、80歳以上の患者の割合が全体の約4割を超えているほか、若年層では、外国出生者の割合が約8割となるなどの課題を抱えています。

一方、世界では、WHO（世界保健機関）の推定で、1060万人が結核に罹患し、130万人が命を落としていると報告されています。2030年までに結核を終息させるというSDGs（国連持続可能開発目標）の達成に向けて、国内での対策を着実に進めていくことがとても大切です。そのために、医療従事者も含め広く人々へ結核についての正しい知識と情報を伝える必要があります。例

えば、高齢者や外国生まれの人々に伝わるように、分かりやすい言葉を使い、必要に応じてイラストや実物を提示するなど、説明の仕方を工夫することも重要なことでしょう。

本日の午後の研鑽集会では、テーマ「あらためて公衆衛生としての結核対策を考える」のもとで結核・呼吸器感染症対策についての講演をはじめ、高齢者の結核、外国出生者の結核、結核病床の課題、関東甲信越地区の婦人会活動について発表がありました。コロナ禍の経験を活かし、地域住民の高齢化や多様な背景をもつ住民の増加に応じたこれからの結核対策を、新たな感染症や疾病の対策と併せて進めていく上で、学びを深めることができました。皆さまの日頃からの結核対策への取り組みを伺い、心強く思います。

本大会に集う皆さまが、ご自身の健康に留意しながら、これからもそれぞれの専門性を活かし、協力・連携し、結核対策をさらに進めていかれますことを願い、式典に寄せる言葉といたします。